

白雲片片

第二十四回

六祖の壁書

達磨大師から数えて六代目の慧能禪師は五家七宗の祖です。幼い頃に父と死別し、母は病弱で家庭が貧しかったため、慧能禪師は薪を拾ってそれを売り、何とか生計を立てて母を養ったと伝えられています。

ある日、慧能禪師は町中で男が金剛經を誦読している声を聞き、「応に住する所無くして、而も其の心を生ずべし」という箇所まゝに じゅう ところな しか そ こころ しように感銘を受けました。そしてその男にどこから来たのか、その經文を誰に教えられたのかを問いました。すると男は蕪州きしゅう黄梅おうばいけん県の東禪院にいる弘忍禪師に習ったと答えました。

出家の志が芽生えた慧能禪師はその後、母の面倒を見てくれる

人を探し、二十四歳の時に東禪院へと向かいました。弘忍禪師に面会した慧能禪師は、さつそく炊事係に任命されます。

東禪院には七百人の雲水が集まっていたましたが、弘忍禪師はそろそろ後継者を決めたいと思っていました。そこで弟子たちに修行の成果を漢詩で表現させて、一番優れた詩を作った者を後継者に決めることにしました。さつそく弟子たちはこぞって漢詩を書いて壁に貼り付けましたが、その中で皆の目を引いたのは多くの弟子たちの中でも抜群に秀才だと評判だった神秀禪師じんしゅう（後の北宗禪の祖）でした。その漢詩は次のものです。

身是菩提樹

身みは是これ菩提ぼだい樹じゅ

（身は悟りの樹である）

心如明鏡台

心こころは明めい鏡きやう台だいの如ごとし

（心は曇りのない綺麗な鏡のようなものだ）

時時勤拈拭

時じ時じ勤きん拈ねん拭ふくに勤つとめ

（いつも精進して綺麗にしなさい）

莫使有塵埃

塵じん埃ないを有あら使しむること莫なれ

（煩惱の塵や埃で汚すことのないように）

神秀禅師の漢詩を見た皆がさすがだと賞賛しました。ところが、この話を聞いた慧能禅師はすぐ人に頼んで自分が思う意味の漢詩を紙に書いてもらい、神秀禅師の紙の横に貼り付けました。この頃、慧能禅師はまだ読み書きができなかったと伝えられています。その時の漢詩は次のものです。

菩提本無樹

菩提本と樹無し

（悟りに樹と呼ぶようなものはない）

明鏡亦非台

明鏡亦た台に非ず

（雲りのない綺麗な鏡もまた台ではない）

本来無一物

本来無一物

（本来、何も持ち合わせていない）

何処有塵埃

何れの処にか塵埃有らん

（一体どこに塵や埃が有るというのか）

この時代の話には後世の弟子たちによる創作が含まれている可能性が高いようですが、真偽はともかく、この漢詩は明らかに神秀禅師の漢詩を意識した上で否定しています。今でいう沙弥に当

たる慧能禅師が、大衆の最上位にいる神秀禅師に対抗する形です。から、山内は大混乱に陥ります。

結局、弘忍禅師は騒動を収めるため、全員まだ不十分だと通告し、漢詩が書かれた紙を剥いで捨ててしまいました。これで山内はどうにか落ち着きを取り戻します。しかし、弘忍禅師は夜中になつてから密かに慧能禅師を部屋に呼び寄せ、達磨大師から伝わる袈裟や応量器などを伝授し、妬みや迫害から逃れるために四年間は世に出るなと忠告して逃がしたのでした。そして慧能禅師は南へ向かい、師匠の忠告を守って獵師の家に隠れて過ごし、その後、曹溪山宝林寺に移つて青原行思、南嶽懷讓、荷沢神会、永嘉玄覺、南陽慧忠各禅師をはじめとする多くの弟子を輩出し、中国で禅宗が隆盛を極める礎を築きました。

ここで道元禅師が宋から帰朝後すぐに著した「普勸坐禅儀」の冒頭部分を見てみます。

『原ぬるに夫れ 道本円通、争か修証を假らん』

宗乘自在、何ぞ工夫を費やさん 況や

全体廻かに塵埃を出ず 孰れか扨拭の手段を信ぜん

『探求したところ、真理は本来、どこにでも行き渡っているのだから、どうして修行を頼つて悟りを求める必要があるのか。釈尊の教えを得るための方法は自然に存在しているのだから、どうしていろいろと努力する必要があるのか。ましてや元来、体全部が塵や埃から抜け出ているのだから、拭いたりするなどの方法を信じるというのか。一般的に言つて、人は釈尊の境地からそれほど離れてはいない。どうして修行の一部分でさえ用いる必要があるのか。』

『探求したところ、真理は本来、どこにでも行き渡っているのだから、どうして修行を頼つて悟りを求める必要があるのか。釈尊の教えを得るための方法は自然に存在しているのだから、どうしていろいろと努力する必要があるのか。ましてや元来、体全部が塵や埃から抜け出ているのだから、拭いたりするなどの方法を信じるというのか。一般的に言つて、人は釈尊の境地からそれほど離れてはいない。どうして修行の一部分でさえ用いる必要があるのか。』

三行目のところは恐らく、上述の神秀禪師と慧能禪師の逸話を意識して書かれたものと推定されます。道元禪師は金剛三昧經にある「本来本法性 天然自性心ほんらいほんぽっしょう てんねんじしやうしん（皆が本来、仏の性質を具えている）」という文言に疑問を持たれて修行されたと伝わっています。が、そのことと普勸坐禪儀の内容は関係していると思われれます。普勸坐禪儀のその後の部分を要略してみます。

「仏の素質は誰にでもあると言えども、何もせずそのままでも仏なのではない。そのまま放つておくとわずかな間違いから始まってどんどん本来の正常な状態からかけ離れていつてしまひ、少しでも現実と合わない見方を起

こせば混乱を招く。たとえ頭脳が優れて様々なことを理解することができ、卓越した判断力があり、わずかな仏智慧や釈尊の教えを得て、天を突き抜くほどの心意気があつたとしても、自分勝手な頭の中の理解に終始してウロウロと彷徨うことになる。そこで文字や言葉を頼りに勉強するのを一旦止めて、光で自分自身を照らす坐禅を行じるべきである。坐禅をすれば身も心も自然にわだかまりが解けて本来の自分が現れ出てくる。その言葉では表しきれない何かを得たいと思ふならば、言葉では表しきれない何かをすぐに実行してみるが良い。坐禅は何かを得るための手段ではなく、坐禅すること自体が安樂の世界への入り口であり、釈尊と同じ境地を体験し尽くす行いである」。

神秀禪師の漢詩からは「人間はそのままではいけないから日々精進しなければならぬ」と、努力をうながすような印象を受けます。また、慧能禪師の漢詩と普勸坐禪儀、また正法眼蔵の各巻からは「人間は誰しもが、もともと素晴らしい素質があるからこそ、仏の教えが実行できる。また、我々が求める真理はそこら中に満ちている。しかし、だからと言つて人間は何もせずそのままでも仏、ということはない。」と、自己や世界を肯定した上で仏性を

自覚して勤めることを説いているように感じます。

神秀禪師と慧能禪師の漢詩、そして道元禪師の著作は、文言や意味は違えども、日々精進しなければならぬことを説いている点に変わりはありませんが、初めに人間やこの世界をどう捉えているかという点で違いがあるように思います。

神秀禪師は慧能禪師よりも三十歳ほど年長だったそうですが、容姿は端正で背が高く威徳があり、当時のあらゆる学問に精通していたそうです。人望も厚く、その徳を慕って則天武后、中宗、睿宗から礼遇を受けて三帝の国師となり、長安、洛陽など大都市の法主にも任命されています。

長安や洛陽周辺の北方で布教した神秀禪師の教えを北宗禪、南方で広まった慧能禪師の教えを南宗禪と言い、慧能禪師の弟子の時代になると南宗禪が北宗禪を攻撃する動きが強くなります。

慧能禪師の教えは「頓悟」と呼ばれ、即菩提を得ることを説いています。神秀禪師の教えは「漸悟」と呼ばれ、修行を段階的に踏むことを説いているのが特徴です。ただし、実際に両禪師が「頓悟」「漸悟」を説いたのかどうか、疑いの余地があります。慧

能禪師の説法を記録した「六祖壇経」は大部分が改変されている可能性が高く、それに関する文章が正法眼蔵「即心是仏」巻に採用されていて、「慧能禪師の教えを意図的に改変した者がいる」と、弟子の一人である南陽慧忠禪師が残念がつている様子が窺えます。また慧能禪師は神秀禪師の推挙により、則天武后に召されて説法をしたとの記録もありますから、そうすると慧能禪師と神秀禪師が対立関係にあったとは考えにくく、弟子たちの時代になってからどちらが弘忍禪師の正統な後継者なのかを争い、二人の関係や教説を創作した可能性があるようです。

道元禪師が継承したのは言わずもがな慧能禪師の法灯ですが、道元禪師は「頓悟」も「漸悟」も両方認めているように思います。「修行が悟り」であれば「頓悟」ですし、また正法眼蔵の中で靈雲志勤禪師や趙州從諗禪師の逸話を採用し、祖師の中には何十年もかけて漸く開明した方々がいることが書いてありますから、どちらが正しい、ということはおそらくおられないように思います。

参考文献／駒澤大学編「禅学大辞典」、西嶋和夫著「普勸坐禅儀講話」、中川孝著「六祖壇経」